

## 日本人同士のティーム・ティーチングについて

中津川 雅 宣  
高 井 收

### 1. はじめに

近年、コミュニケーション重視の英語教育が主流となり、ティーム・ティーチング（以下、T.Tという）も様々な場面において研究され、教室内に導入される場面が多く見られてきている。1987年にJapan Exchange and Teaching Programme（以下JET Programmeと言う）が導入されてきてから、多くの外国人が来日し、ティーチング・アシスタント（以下、T.Aという）として、学校現場において生きた英語というものを提供するようになった。McConnell（2000）によれば、「このJET Programmeで派遣されるT.Aのうち、90%以上がネイティブ・スピーカーであり、日本のようなEFL (English as a Foreign Language) の環境においては、非常に大きな役割を果たしている」と述べていることからわかるように、教室内におけるT.Tの役割が非常に重要視されてきている。

しかしながら、依然として、多くの生徒はT.Tの機会に恵まれず、これらのT.Tに関する論文の多くは、日本人と、ネイティブ・スピーカーの教師によるものを前提に書かれているものがほとんどである (Tajino & Tajino, 2000)。また、ネイティブ・スピーカーの絶対数も少なく、教室で彼等と直接に触れ合う機会も得られず、教室内の言語使用は日本人教師による母国語がほとんどであり、目的言語使用の機会も限られている。

本稿では、小樽商科大学のT.Tの実情とともに、著者である二人が行ったT.Tについて検証し、日本人同士のT.Tの有効性について考察する。

### 2. ティーム・ティーチングについて

T.Tとは、二人の教師がお互いを補助し合い、学習者がより多くの英語に触れる機会を作り出すという役割においては、非常に効果的である(Shimaoka & Yashiro, 1990)。学習者が英語をアウトプットする際、2人の教師がいれば、より多くのアウトプットの機会ができ、そしてそのフィードバックを得られることは、言うまでもないであろう。Long (1983)もその著書の中で「学習者は会話を通して言語を習得していく」と述べていることからわかるように、教室内の会話が言語学習には重要な要素であり、T.Tにおいてそれを効果的に行えることは明らかである。また、Richards (2002)は、T.Tについて、以下のように述べている。

Team-teaching is based on a view that teachers work best when they work in collaboration with a peer. And that the interaction with a colleague in all phases of teaching is beneficial to both teachers and learner. (p.23)

ここでRichardsが述べていることは、英語を母国語としない教師でも有効であるということだ。

英語を母国語としない教師であっても、英語習得者のモデルとして、言語習得に対する情報や、学習者にとって困難になる要素を事前に予測し、サポートすることができる。そして、学習者と文化的・社会的要素を共有することによって、学習者の情意フィルターを下げる役割も果たすことができる(Medgyes,1994; Tajino & Tajino, 2000)。

しかしながら、英語を母国語としない教師がすべてプラスに働くというわけではない。その一つは、オーセンティックな英語に触れるということが少なくなるということだ。また、授業を通して、異文化に触れるということも少なくなることだろう(Gorsuch, 2002; Miyazato, 2006)。

今回、オーセンティックな問題についてはCDを使うことで補い、また教師同士の会話も極力英語を使うことにより、できるだけ多くの英語に学習者が触れるよう心がけた。多くの学校で、ネイティブ・スピーカーのAET (Assistant English Teacher) がテープレコーダーのように使われ、そして、日本人教師も「通訳」として使われているということが報告されている (Kumabe, 1996; Mahoney, 2004) が、英語を母国語としない教師との間では、このようなことも起こらなかった。

### 3. 本学学生におけるティーム・ティーチング

#### 3. 1. 本学でのティーム・ティーチングについて

それでは、本学では何人の学生がT.Tを経験したことがあるのであろうか。英語 I D (E171, E172, E173, E174の4クラス)、英語 II A2・II B2 (E221, E222, E223の3クラス) を履修した学生を対象としてティーム・ティーチングにおける経験の有無についてのアンケート調査(資料1参照)を実施した。その結果によると、英語 I Dでは、152名の学生に対して経験があると回答した者は、52名であった。また、英語 II A2・II B2では、236名の回答者中、65名という数であった(表1参照)。

表1 ティーム・ティーチングの授業を受けたことがある。

(英語 I D)

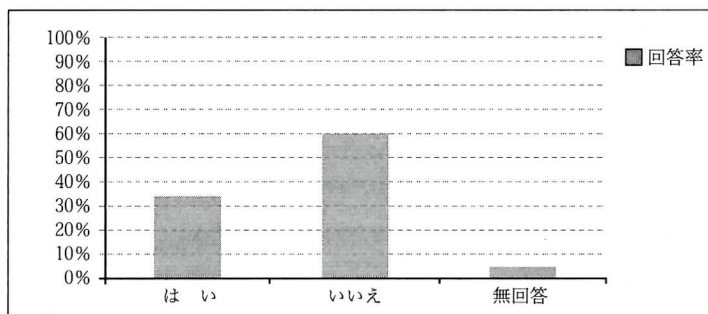
項 目	は い	い い え	無 回 答
回 答 数	52	92	8
回 答 率	34.21%	60.53%	5.26%

(英語 II D)

項 目	は い	い い え	無 回 答
回 答 数	65	165	6
回 答 率	27.54%	69.92%	2.34%

日本人同士のチーム・ティーチングについて

英語 I D



英語 II D

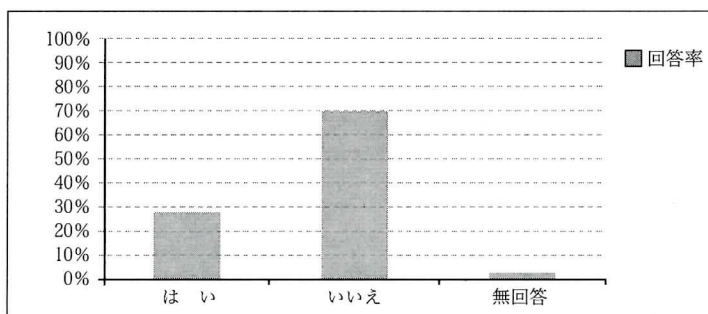


図 1

ここから、多くの学生がT.Tを経験したことがないということがわかる。また、この調査で、経験があるという回答をした学生に対して、どのようなチーム・ティーチングだったかという質問に対しては、複数回答があったものの、英語 I では、62名中、42名が日本人と外国人のチーム・ティーチングであったことがわかり、英語 II では、74名中、54名であることがわかった (表 2 参照)。

表 2 質問項目：それはどのようなチーム・ティーチングでしたか。

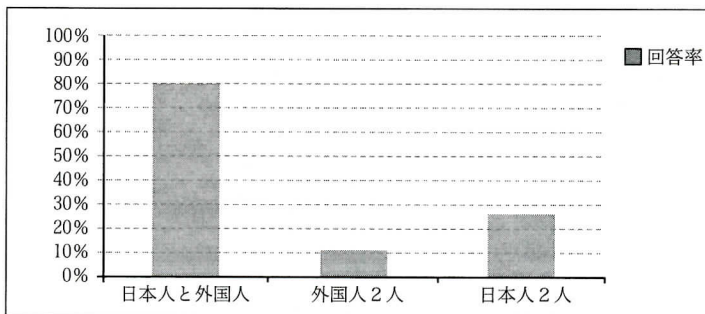
英語 I

	日本人と外国人	外国人 2 人	日本人 2 人
回 答 数	42	6	14
回 答 率	80.77%	11.54%	26.92%

英語 II

	日本人と外国人	外国人 2 人	日本人 2 人
回 答 数	54	4	16
回 答 率	83.08%	6.15%	24.62%

英語 I D



英語 II D

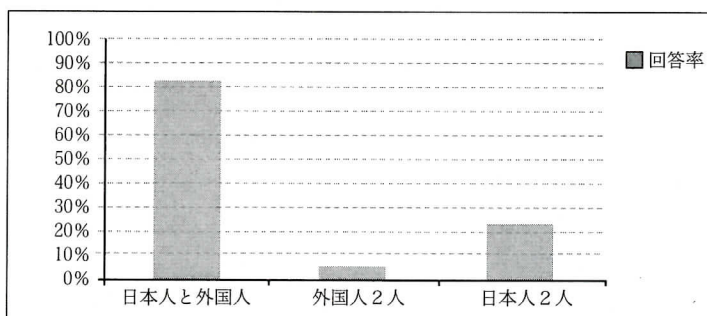


図 2

以上の結果から、前述のとおり、T.Tの経験をした大多数が日本人の教師とネイティブ・スピーカーの教師とのT.Tであり、外国人同士や、日本人同士でのT.Tの授業を受けたことがある学生は極端に少ないことがわかる。

### 3. 2. 英語 I (E145C) でのチーム・ティーチングについて

今回、2008年度に開講したE145Cでは、筆者であるT.A (Teaching Assistant) の中津川とクラス担任の高井がT.Tを実施した。この授業では、『Insights-Critical Thinking through Cross-Cultural Essays from The Japan Times-』(Shaules, J. & Miyazoe T., 2005) という教科書を使い、リーディングを重視とした授業であった。前半を高井が担当し、教科書の音読を中心に内容理解を図り、後半を中津川が担当し、教科書の練習問題に沿ってQ&Aを用いて内容理解を確認するとともに、教科書内に出てくる単語や文法の理解を深めた。もちろん、担当していないパートでも、机間巡視や、説明の補助をして学習者の理解を手助けし、効率的な授業運営を目指した。

## 4. 学生の反応

授業の終わりに、学生たちの反応を見るためにアンケート調査を行った(資料2参照)。アンケートでは、授業に対する質問に加え、学生たちのT.Tの経験の有無等を二択で聞くものも含まれた。このアンケートの結果によると、学生たちは「T.Tの経験はしたことがない」と答えた者がいたものの、「違和感なく授業に取り組むことができた」そして、「内容理解につながった」と回答する者がほとんどであった。

日本人同士のチーム・ティーチングについて

質問1-1、1-2では、学生のT.Tの経験についての質問をした。今まででT.Tの授業を初めて受けたというものに対して、「いいえ」と回答した者のほうが多いという結果になったが、そのうち、どのようなペアであったかという質問に対しては、80%以上が日本人と外国人であることがわかった（図4参照）。

表3 質問1-1. 1つの授業を2人の先生で教える授業は初めて受けた。(ALTを含む)

	はい	いいえ
回答数	8	11
回答率	42%	57%

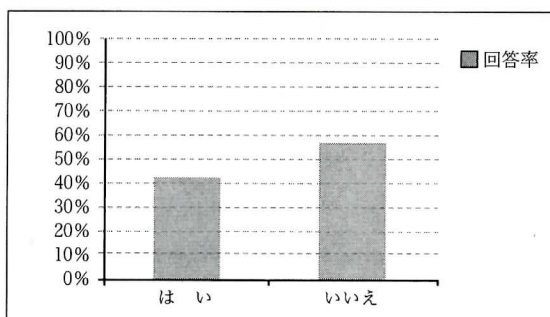


図3

表4 質問1-2. どのようなチーム・ティーチングでしたか。

回答種別	日本人と外国人	外国人2人	日本人2人
回答数	9	1	1
回答率	81%	9%	9%

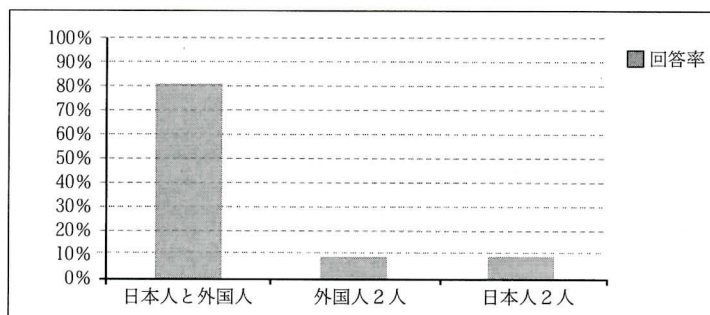


図4

次に、質問2では、T.Tの有効性について問うために、1人の先生より、2人で教えてもらったほうが良かったかを「1.そう思わない」から「5.そう思う」までの5段階評価で聞いた。表5を見てわかるように、多くの学生が、T.Tの授業に対して良い印象を持っているということがわかった。

表5 質問2. 1人の先生より、2人で教えてもらったほうが良かった。

回答種別	1	2	3	4	5
回答数	1	0	0	16	2
回答率	5%	0%	0%	84%	10%

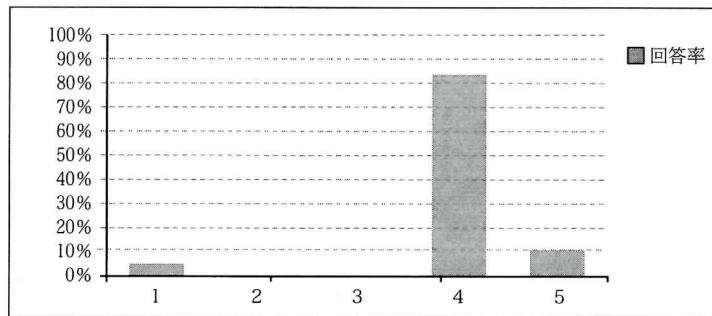


図5

質問3では、その内容を問うために、どういった面でよかったのか、選択式の質問を設定し、回答を得た。その結果によると、「2.変化があって飽きなかった」が全体のうち、42%を占めて一番多い結果となった。これは、前述のように役割を分担して授業を行ったことが良かったことが伺える。また、担任の教師が授業を展開していく中で、もう片方が学生たちに質問を投げかけて、英語で回答させるなどをする事によって、「3.英語で話す機会が増えた」と回答した学生も31%と多いことがわかった。

表6 質問3. どういった面でよかったですか。

回答種別	1	2	3	4
回答数	5	8	6	0
回答率	26%	42%	31%	0%

日本人同士のチーム・ティーチングについて

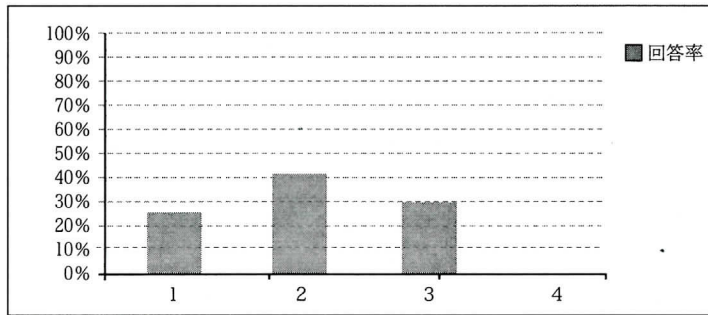


図6

また、日本人同士でのチーム・ティーチングが、ほとんどの学生にとって初めての経験であるだろうと予想し、日本人同士のチーム・ティーチングに抵抗があったかどうかということについても問うた。

表7 質問4. 日本人のペアが教えるのは抵抗があった。

解答種別	1	2	3	4	5
回答数	9	7	2	1	0
回答率	47%	36%	10%	5%	0%

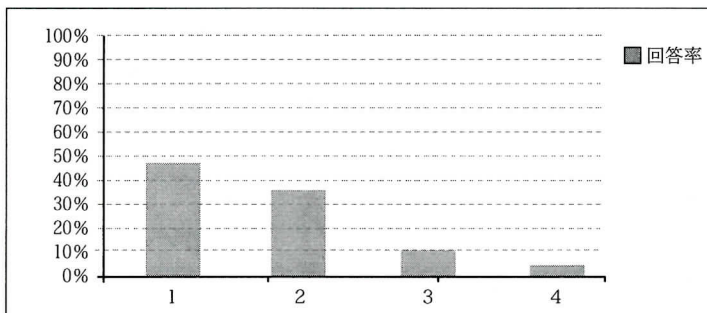


図7

結果を見てわかるように、回答率で80%以上が日本人のペアに対して抵抗がないという結果になった。学習者にとってネイティブ・スピーカーの教師に英語を学ぶことは、比較的まれであり、文化的に心理的な負担となるケースも見られるが、同じ文化的・社会的背景をもった日本人同士のT.Tであることが、学習者にとっては心理的にもさしたる抵抗もなく、英語学習に取り組めた要因の一つになったのではないかと推測される。

最後の設問に対しては、どのようなスタイルで英語を学習するのが良いのか、複数回答で問うた。アンケートによると、「3.日本人とALT」が半数以上を占める結果となった(図8参照)。これ

は、日本人の先生による文法やreading comprehensionなどのインプット中心の指導と、ネイティブ・スピーカーによるアウトプットを中心とした発音の指導や会話の指導といったバランスの良い指導の理想を学生が頭に描いている結果だといえよう。

ただ、ここで注目すべきは「2.日本人のペア」が全体の回答のうち、34%を占めている点である。学生たちの中には、「安心して学習に取り組めた」、「片方の先生の説明がわからない時でも、もう一人の先生が説明してくれた」など、肯定的な意見が多く聞かれた。

表8 あなたは、どのようなスタイルの授業が良いと思いますか。

解答番号	1	2	3	4
回 答 数	1	8	13	2
回 答 率	4%	34%	54%	8%

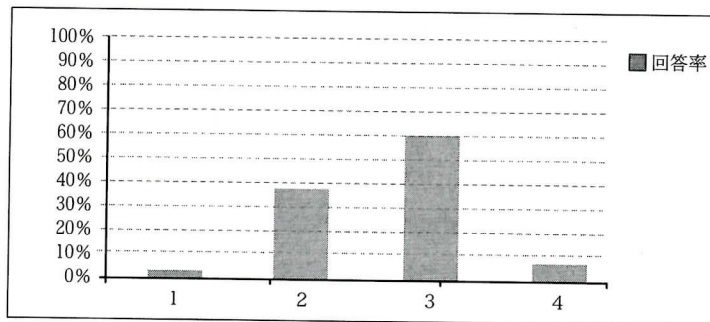


図8

## 5. おわりに

本稿でのデータは統計的に見れば非常に限られた数であり、一般化した結論を導くことはできないが、学習者のT.Tに対する評価のアンケート調査結果などから考えると、今後の英語教育の分野においてT.Tは、多様化して発展させてゆく余地があるといえよう。ネイティブ・スピーカーの数が限られているため、いかにしてアウトプットを増やしていくかは、日本のようなEFL (English as a Foreign Language)の国において、今後、より一層その必要性に迫られてくる。そうした中、日本人同士のT.Tが一つの解決策のカギとなることは明らかである。今回の調査結果により、日本人同士が行うT.Tにおいて、多くの学生が違和感なく授業に集中できたことがわかる。また、そのほとんどが、日本人同士のT.Tの授業形式に良い印象を得たことがわかった。

これまで、JETなどのプログラムにより、ネイティブ・スピーカーの力を借りてT.Tが行われてきたが、需要に対するネイティブ・スピーカーの人数やその他の面で、現状は必ずしも満足いくものではない。今後、日本の様に日常生活が日本文化であるという中で、英語を外国語として教えてゆく場合には、同じ文化背景を持つ日本人同士によるT.Tの授業形式が、現状に即した一つの外国語教授法として非常に有効であると考えられる。



参 考 文 献

- Carless, D. R. (2006). Good practices in team teaching in Japan, South Korea and Hong Kong. *System*, Vol.34, Issue3, p.341-351.
- Gorsuch, G. (2002). Assistant foreign language teachers in Japanese high schools: Focus on the hosting of Japanese teachers. *JALT Journal*, 5-32.
- Kumabe, N. (1996). 「ALT導入がもたらしたもの」. *Modern English Teaching*, 9,13.
- Mahoney, S. (2004). Role controversy among team teachers in the JET Programme. *JALT Journal*, 2,p.223-244.
- Medgyes, P. (1994). *The Non-native Teacher*. London: MacMillan.
- Miyazato, K. (2006). Investigating present realities of non-native English teachers in Japan: From the perspectives of NS-NNS issues. *The Language Teacher*, 15.
- Richards, J. (2002). Theories of Teaching in Language Teaching. In J. & Richards, *Methodology in language teaching: an anthology of current practice* (p. 23). Cambridge: Cambridge University Press.
- Shimaoka, T. & Yashiro, K. (1990). *Team-teaching in English classroom- An Intercultural Approach*. Tokyo: Kairyu-do Shuppan.
- Tajino & Tajino. (2000). Native and non-native speaker: what can they offer? *ELT Journal*, 54,p.3-11.

## 資料 1

1. 今まででチーム・ティーチングの授業を受けたことはありますか。

は い      ・      いいえ

「は い」と答えた人

9-1. それはいつですか

中学校                      高 校                      大 学

9-2. それはどのようなチームでしたか。

日本人と外国人                      外国人2人                      日本人2人

## 資料 2

1-1. 1つの授業を2人の先生で教える授業は初めて受けた。(ALTを含む)

(は い      ・      いいえ)

1-2. 「はい」と答えた人：(日本人のペア・日本人とALT・外国人ペア)

2. 1人の先生より、2人で教えてもらったほうが良かった。

3. どういった面でよかったですか。以下から選んでください。

- ①質問がしやすかった。
- ②変化があって飽きなかった。
- ③英語で話す機会が増えた。
- ④その他

4. 日本人のペアが教えるのは抵抗があったか。1.を抵抗があった、5.を全くなかったとして答えてください。

5. あなたは、どのようなスタイルの授業が良いと思いますか。

- ①日本人の先生
- ②日本人のペア
- ③日本人とALT
- ④外国人の先生